

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<随想>高校の古典教材

著者	成清 良孝
雑誌名	日本文学誌要
巻	54
ページ	104-105
発行年	1996-07-13
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019901

高校の古典教材

成 清 良 孝

もう六、七年も前になるだろうか。わたしがまだ現職の高校教員をしていた頃、ある都立商業高校二年生を対象にした古典の研究授業を見に行ったことがある。

授業をした人は四十代後半の女性で、一般に教員としてはいちばん充実している年齢と言われている。扱った教材は『更級日記』で、授業そのものは、いささかの破綻もなくスムーズに進行し、指導者の言動も生き生きとしてめりはりがあった。

しかし、研究授業の後、助言者や参観者たちを交じえた懇談会の席上、研究授業をした女教員の話聞いて、年老いて感受性が相当鈍くなり大抵のことには動じなくなったわたしもまさに驚愕動転したのである。

その研究授業は十一月の中旬に行なわれたが、彼女の話によると、一学期の中頃から、これまで週二時間の国語の授業は、ずっと更級日記ばかりを扱っていて、他の古典教材はもちろんのこと、現代文の教材や当然それに付随する作文や漢字の指導もすべてネグレクトしてきた、と言うのである。

この人は更級日記にぞっこん惚れ込んで、憑かれたようにこの教材だけを扱いつづけてきたのである。高校の国語科が単なる日本の古典だけに限定されず、もっと多様な指導目標をもっていることなど、彼女にはまるで念頭にはないかのようだった。更級日記にこだわりの、それを極端に突出させて指導することに何のためらいもないかのようだった。その絶望的な視野の狭小、アブノーマルなバランス感覚に対する自覚症状は全くなかった。

この女教員ほどでなくても、国語の教員の中には、古典となると、すぐ平衡感覚を喪失して醜い自己陶醉に陥り、べたべたと擦り寄っていくたぐいの人間が多いように思われる。高校の国語教育は古典の教員を養成するための予備校ではないのだ。まして商業高校の生徒は卒業するとすぐに実社会に参入する場合が多い。古典の魅力を味わわせる必要を否定はしないが、それも程度もので、より優先させなければならぬことは、現代語の言語感覚や現代文の咀嚼力を身につけさせることであろう。多様な現代文を読ませて、問題意識を刺激し、発想の豊かさやさまざまな価値観の存在を教えてやらねばなるまい。さらに作文力や漢字の正確な記述力は、更級日記（源氏物語と置き換えてもよい）を味読させて得られるものよりも、彼らにとってはお話にならないくらい現代を生きていくための大事な生活力になると思う。

さつき「古典の魅力を味わわせる……うんぬん」と書いたが、わたしは高校三年にあたる時期の夏休みに、大学受験勉強の一環として「更級日記」を全編読んだのである。その直接のきっかけは堀辰雄の更級日記に取材した「嬢拾」のエピソードとも言えるエッセーだった。

（前略）遂に或日そのかすかな枯れたような匂の中から突然ひとりの古い日本の女の姿が一つの鮮やかな心像として浮かんで来だした。（中略）その鮮やかな心像は私に、他のいかなるものにも増して、日本の女の誰でもが殆ど宿命的にもっている夢の純粹さ、その夢を夢と知ってしかもなお夢みつ、最初から諦め（あきら）の姿態をとって人生を受け容れようとする、その生き方の素直さというものを教えてられたのである。

わたしは堀辰雄のエッセーに刺激されて更級日記を読んだけれども、読んだ後、深い絶望感にうちひしがれた。一生かかっても堀辰雄の古典に関する鑑賞力や感受性にはとてもかなわない、と思った。従って地方の国立大学でも、法政大学の夜学でも、卒業論文は日本の古典ではない。法政大学の場合は、身につまされて泣いた田山花袋の『田舎教師』であった。

長い間、都立高校の国語の教員をやってきたのだし、現在も毎年旺文社の大学入試問題の解答解説の仕事をやっているのだから、否応なしに日本の古典とのかかわりはある。古文の問題文には、すべて口語訳をつける。これは殊のほか苦心している。

大学入試の出典は相も変わらず、「源氏物語」「枕草子」「徒然草」

のご三家が主流を占める。大学の先生たちは奇妙な事大主義に汚染されているのではないのか。なかには学習指導要領を基準にした高校生の学力の算定を全く考慮に入れず、おのれの専門領域できみかえって出題していると思われる、ひどいご仁がいる。

「源氏物語」など、一部を切り取ってさし示されても、よほど精通していないかぎり、その脈絡はわからない。

大学進学希望者の多い高校では、泣く子と地頭と大学の先生には勝てぬ、とばかり補習教材として源氏物語の抄本などを使う。生徒はたいてい消化不良を起こしている。「源氏物語」は七十余年にわたり、四百余人の人物が登場するが、整然とした構想を持ち、人物の性格や心理は細かく書き分けられ、背景となった自然は人事と巧みに融合され、和歌を交えた文章は流麗で気品がある」（高校生向けの教科書）といった効能書きが作品に即して真に理解できるまでには、どれだけの時間とエネルギーが必要だろうか。気が遠くなる話だ。大学で古典や日本史専攻をめざす人だけが読めばよい。

源氏なんかを読ませるより、吉行淳之介の「食卓の光景」や「武勇談」などの方がずっと現代人としてシャープな言語感覚や感受性が養われる。それに文芸作品ではないが、丸山真男の「幕末における視座の変革」（『忠誠と反逆』所収―筑摩書房）を読ませたらよい。対象への愛情と客観的認識が混乱するようなどこかの国のPTAの母親と同次元とも言える一部の国語の教員や国文学者は少くとも生まれまい。

（なりきよ よしたか・一九五六年卒）